長門ユキのアルバイト

亜門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
長門ユキのアルバイト

【Ｎコード】
Ｎ６９０６Ｌ

【作者名】
亜門

【あらすじ】
涼宮ハルヒの憂鬱の二次創作です。
消失後、ハルヒ達は雪山のロッジに行こうとするのだが…

いつも通りの平凡な部室。
我がＳＯＳ団は非日常な毎日を過ごしてる訳じゃないさ。
ハルヒは暇そうにパソコンのアクセスカウンターをブン回していた。
「相談のメールも来ないし暇」
「こう心霊現象や怪奇現象は起こらないのかしら」
そりゃそうさ怪奇現象や心霊現象そう起こって欲しくないね。
それに起こったとしても稲川淳二に任しておけばいいし。
探偵ナイトスクープっていう手もあるぞ探偵手帳が貰えるし…。
それに、宇宙人、超能力者、未来人が同時に活動してる部活それだけでいいではないか。
世界中探してもないぞ、こんな部活…
そんな風に考えながら古泉とトランプをしていた。
部室には変わらずの風景。
椅子に座りながら本を読む長門。
お茶を入れてくれる朝比奈さん。
いつも通り時間が流れていく…

「みくるちゃん、古泉君、ゆき、今年の冬は何処か行かない？」
なぜ俺には聞かないそれはそれで嬉しいのだか…
少し寂しいじゃないか。
そんな顔をしていたのか分からないが突然ハルヒが。
「キョン、あんたは暇でしょ」
暇は暇だが親戚の家に行ったりまぁ暇か…
「いいですね。今年の冬は予定がなく困っていたんですよ」
微笑みフェイスの古泉が髪をかきあげながら言った。
「私も暇ですよ。」
朝比奈さんはオロオロしながら言った。
「了解した。」
長門は本を目から離さずに答えた。
「大晦日にロッジで過ごすわよ」
どこから解らないがチラシのような物を見せて来た。
「向こうでスノボーも出来るわよそれに年末の紅白歌合戦なんて見ても面白くないし。」
「それに思うのよね年末の紅白はオリジナリティーがないわ」

「あんなんじゃ受信料返せって話よ。そりゃ視聴率も下がるわよ。」
ハルヒは評論家の様に語り不満をぶちまけた。
何か恨みでもあるのだろうか…
その日の部活は終わり帰宅する事にした。
みんなで長い下り道を下りながら。
「この時期にロッジを見つけてくるなんてさすが涼宮さんだと思いません？」
古泉はハルヒに聞こえない様に喋りかけてきた。
たしかにそうだもう時期も時期だし予約など埋まってるハズだ。
「もちろん貴方も行くでしょ」
「そのつもりだが」
家に帰り親に相談しなければ値段が値段だし…
「今回の旅行は何かあるのか？」
「涼宮さんが皆で過ごしたいと望んだだけだと思いますよ。」
「それにとても良い事だと思います。」
「古泉は旅行の費用は機関から出るのか？」
「ええ、勿論ですよ。」

どこにも所属しない俺は大赤字だ。
長門も朝比奈さんも…
頼むから俺のも出してくれと思いながら家に着いた。
親に頼み込みしぶしぶ許可を頂いた。
妹も行きたいと言ったが今回は古泉の機関もちではないし留守番をしてもらう事にした。

二日後…
放課後ｓｏｓ団部室へ向かう途中長門に会った。
「アレ…部室へ行かないのか？」
「バイト」
長門は俺の顔を見ながら言った。
「バイト？なぜお前がどうして？」
「前の事件以来生活範囲を越える支援が無くなった」
「旅行費って事か？」
「そう」
「そうか、大変だな。どうしてなんだ？」
前の事件、ハルヒの消失からか…

「貴方にも解りやすく言うと。情報統合思念体が教育に悪いと認識したから」

「教育に悪いか…」

恐らく甘やかし過ぎてたと言う事だな…

あの事件からどういった関係が？

よく解らないが頑張れ長門

「送れる…しばらく部活は出れない。」

そう言い長門はバイト場へ向かったのだ。

なんのバイトか気になったが。

大丈夫長門なら上手くやるさ、だから心配ない。

それに長門自信もみんなで旅行に行きたいのだろうと思うと胸が何故かホッとする。

俺は部室に向かうとするか。

部室の前に行きドアにノックをした。

朝比奈さんの着替えを見ない為の習慣さ。

「どうぞ」

朝比奈さんの声を聞きメイド姿の朝比奈さんを頭に浮かべながらドアを開けた。

期待通りの朝比奈さんがそこに居た。

俺はいつも通りに椅子に座った。

古泉は俺が椅子に座るのを確認するとオセロかチェスどちらかしませんかと言いたそうななジェスチャーを俺に送った。

俺はオセロを指さし。

古泉はオセロの板を広げた。

「キョン、ユキ知らない？」

「長門ならアルバイトに行ったぞ」

「アルバイト？、なんで早く言わないのアンタ見たいなヒラがしってって団長の私が知らないなんて」

「さっき廊下で会ってな、旅行のお金を貯めるそうだ。」

「そう…相談してくればいいのに」

「長門さんなら大丈夫ですよ。なんのバイトなのですか？」

古泉は言った。

「何かは聞いていないんだ」

「そう…」

ハルヒは不満そうに団長席から見える空を見ていた。

数日後…

廊下で長門に会った。

「よう、長門バイト頑張ってるか？」

コクりと長門は頷いた。

「何処でバイトしてるんだ？」

「光東園の本やでバイトをしている」

「そうか本やかまた見に行くよ」

光東園とは学校が回りに多い駅だなこの辺りで住みやすさは上位ランキングに入るであろう。

無表情にコクりと頷くだけだった。

長門と別れ俺は部室へ長門はバイトへ行った。

その日の部室は特に何もする事なく終わった。

部室を出ようとした時

「キョン、今日ちょっと付き合いなさい」

ハルヒは俺の腕を掴んだ。

「どこに行くんだよ」

市内探索とか言わないでくれよと思いながら言った。

「ユキのバイト場よ」

普段はあまり長門に興味がないクセに…

「そうだな。行ってみるか。」

俺も少し気になってはいたし行くか。

「アンタ、ユキの事は気になるみたいね」

そうさ、あの日朝倉に殺されそうになった時命を助けてもらったり、コンピュータ研の部長の時だって…

気にしてやる事しか今の俺には出来ないさ。

それにお前だってたくさん世話になってるんだぞ。

俺はいつかハルヒに言ってやろうと思った。

そんな日がいつか来れば…

俺はハルヒと長門の様子を見に光東園の本屋へ向かった。

光東園駅に着いた俺とハルヒは本屋へ向かった。

駅の横の建物の二階だ。

「ユキよ」

ハルヒはそう言い。

本棚に隠れた。

俺も腕をひっぱられしゃがんだ。

「ハルヒ、なぜ隠れるんだ」

「こういうのは影から応援するもんなのよ」

ハルヒは嬉しそうに言った。
コイツ楽しんでやがるな。
ハルヒの顔を見てるとそんな気がした。

「長門さん研修は終わったので今日から一人で頑張ってね。」

「後しっかりとお客様に本の告知をしてね。」

バイトリーダーらしい４０代の女性だ。

「了解した」

無表情にレジに立つ。

客が本をレジに持って来た無表情に接客をタンタンと済ませていく。
一人の男性が恥ずかしそうに逝かしてソウロウと言う１８禁の本を持って長門のレジに来た。

「貴方は逝かしてソウロウを先週も購入している。
有り難う御座います。
来週も購入すると思われますが御自宅郵送の定期講読をお勧めする」

何を言ってるんだ長門確かに親切だが何か違うぞ。

ハルヒと俺は顔見合わせた。
客は恥ずかしそうに商品を受け取り店を出て行った。
長門は不思議そうに客の背中を見ていた。
俺とハルヒは長門の接客を少し見て気付かれないように帰った。

数日後…

廊下で長門に出会った。
「何を読んでるんだ？」
長門は無表情で手に持ってる二冊の本を見せてくれた。
「バイト雑誌か…クビになったのか？」
もう一冊は夜系の仕事雑誌だ。
表紙からして風俗系だな…
コクりと頷いた。
「長門もう一冊の雑誌は違うと思うぞ」
「時給が良い。」
長門その考え方は危険だ…誰だって金は欲しいさ。
こっちの雑誌は俺が預かっておくからこっちの雑誌から選べ」

娘を心配するよう父親の様に言った自分が恥ずかしくなった。
長門は不思議そうに俺の顔を見て。
「了解した」といい音を立てずに歩いていった。
俺は雑誌を持ってドアを入念にノックし部室に入った。
誰も居ないので長門の雑誌をチェックしていた。
時給が高いな、世の中にこう言う仕事が成立する理由が解ったような気がしてきた。
いきよいよく部室のドアが開き聞きなれた声が聞こえた。
「アンタが一番なんて珍しいじゃない感心、感心」
ハルヒだ、思わず雑誌を鞄の中へ閉まった。
「何を隠したの見せなさいよ」
俺に近づき鞄を奪おうとする俺も必死に何故か抵抗する。
「私に見せれないの。団長よ団長、アンタにプライバシーはないのよ」
意味の解らない理由を言ってくる誰かコイツに日本国憲法の幸福追求権を説明してやってくれと頭に思い浮かべながら、鞄を守ろうとしたがコイツの馬鹿力には勝てず鞄は取られてしまった。
「ハルヒはそれは違うんだ…」
タイミング良く朝比奈さんと古泉も部室に入って来た。

「どうしたんですか？」
古泉は言った。
「キョンが私に隠し事をしてるのよ」
俺の勝手だろうと思っていたらハルヒは鞄をあさりだした。
「これね」
嬉しそうに雑誌を取り上げた。
「何これ」
ハルヒは目を細目ながら言った。
「最低です」
そう言いながら手で顔を隠した。
「これはいわゆる風俗雑誌ですね」
古泉は説明しだした。
こんな時にコイツの説明を聞くと更に腹が立つ。
「違うんだ」
俺は誤解を解く為に説明をした。

「そうだったんだ…ユキも困っていたんだわ」

「誤解してごめんなさい」朝比奈さんはオロオロしながら言った。

貴女の誤解が解ければ問題ないです。

「ユキも冬の旅行へ行ける様にしましょう…団長命令よ」

その頃長門は…

光東園から歩いて１０分位のパソコン屋で面接をしていた。

「長門さんはあれパソコン好きなの」

「興味がある」

「そうか…面白いもね、ここにある新機種とかどう思う？」

「原始的」

「原始的？型遅れ？」

「製能が悪い」

「そうか…」

バイトに受かる訳もなくその後もガソリンスタンド

レジ、と面接は落ち通続けていた。

数日後…

放課後

俺はいつもの予定通り部室のドアをノックし部屋に入った。

長門が椅子に座り本を読んでいた。

「よう、長門バイトは？」

「受からない…」

「そうか…」

会話も続かずこの空気をどうにかしてくれと思った所にハルヒが入って来た。

「おっはぁー」

ハルヒは団長席に座り込み。

「ユキバイトの面接駄目だったの？」

コクりと長門は頷いた。

「そう…何がダメだったかわかる？」

「……」

「分からないの？なら明日の放課後キョンのバイトばへ行きましょう。」

そう俺たちＳＯＳ団は団長命令で長門の旅行費を集める為にアルバイトを始めていた。

朝比奈さんは喫茶店

古泉はレジ打ち

ハルヒは家庭教師

俺は某有名ファーストフードでアルバイトをしていたのだ。

ちなみ今日俺とハルヒは休みだ。

休みだというのに部活動をしにワザワザ…団長命令でバイトが休みの日は部活動する事になっている。

そもそも部活動と言っても特にはする事が無いのが…我らがＳＯＳ団…帰らしてくれ…

朝比奈さんの居ない部室になんの価値がある。

誰か教えてくれ？

「なんで、俺のバイト場なんだよ？」

「わかるでしょ、あんたの仕事をしてる姿を見て勉強するのよ」

次の日…学校が終わりバイトをしていた。

某有名ファーストフード

誰もが一度は食べた事があるハンバーガと言えば分かるだろうか。

今日ハルヒと長門が来るんだなと思いレジをしていた。
「キョン似合ってるじゃない。」
ハルヒと長門が来た。
「チーズハンバーガセットね、ユキは？」
黙って目線を送るその先はハンバーカ二つ分を一つにしたバカでかいのだ…
「それね」
「以上でいいのか長門？」
黙って指を指すスマイル０ＹＥＮ
スマイル？
スマイルが欲しいのか？
ハルヒはあぜんとしている。
「長門冗談はよせよ」
黙ってクビを降る。
「わかったよ…」
俺は出来る限りスマイルを送った無表情の長門に…
長門の無表情を見ていると恥ずかしくなった。
「私もスマイル五個」

ハルヒもなぜか注文しだした。

「五個ってなんだよ」

「五回すればいいでしょ…」ハルヒにスマイル五回した…三回目からはハルヒは目をそむけた。

バカらしさに気づいたのか解らないが…

「スマイルお持ち帰り」

長門は無表情に言った。

「お持ち帰りってなんだよ？」

俺は長門のボケかと思いすかさず突っ込んだ。

「家に来ればいい…」

回りの客達も変な空気が流れ出した。

「ユキ、アンタ何言ってるかわかってるの？」

「キョンを家に入れたら何されるかわからないんだから…それに絶対ダメたがらね団長命令よ」

ハルヒはそう言い長門と席へ着いた。

ハルヒは、俺のところまで戻って来て。

「絶対に行ったらダメだからね。」

「もし行ったら私刑のうえに死刑だから」

そう言い席へ戻った。

その後俺の仕事ぶりが役にたったのか解らないが長門はコンビニでアルバイトをする事になった。

変な大学生がやるより遥かにましさ。

しばらくは部室の椅子に座る読書少女の姿は見れそうにもない。

今頃もコンビニで頑張ってるハズ…

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6906l/

長門ユキのアルバイト

2010年10月9日16時22分発行